

## 『戦前期外地活動図書館職員人名辞書』刊行に寄せて

岡村敬二（京都ノートルダム女子大学名誉教授）

この7月初旬に標題の人名辞書を刊行することができた。戦前期に、朝鮮・台湾・満洲・樺太、さらに満洲国の図書館などに勤務した図書館職員の事績を記述したもので、おおよそだが二七〇〇名を採録した。ここではこの辞書の特色三点を述べてみる。

### 職員全員の採録をめざした

この全職員を採録する、というのが本書で最もこだわった点である。採録は各種の要覧や館報などによったが、そこに出ている職名でいうと、小使、守衛、出納手といった人から図書館長にまでに及んでいる。小使、守衛といった人たちは、いわゆる図書館活動には参与していないのではないと言われるかもしれない。ただこうした人たちにあっても、図書館内の研究会で発表を行ったケースもあり、後に昇任している場合もあったりする。

そして、これは人名事典編纂の常だが、採録する人名を選ぶのに大きな困難が伴うという事情もある。特に本書のように外地の図書館職員など、依拠できる資料は少なく、詰まるところ、書ける人物、また執筆者に関心のある人物に偏りがちである。それはやむを得ないことでもある。だが今回のわたしの辞書では、そうした壁や限定をいちど取っ払って、判明した人物はともかく全員、事績のうち書きたいと思うことは全てを書く、ということを目指して取り組んだ。たとえば満鉄図書館の主任級の人物のうちで、先のような事情から採録・不採録が出てくる事態を避けたいと考えた。恣意性はできるだけ無化したいと思ったのだ。

### 刊行は自費によった

このような事典を作ろうとすると、どうしても出版社の編輯面や営業上で衝突をきたす。版元は、最大多数の読者に受け入れられ、読みやすく、人物の採録にあたっては一定の基準のもとに、誌面はバランスの取れたものとし、そして定価を抑えたいと考えるからである。出版社としては当然のことである。大きな赤字を出しては元も子もないからである。それを克服する方法は何かと考えてみた。それは、自分には大きな負担となるが、自費による制作という結論だった。定年退職後の身分には大きな出費だが、自費の制作を選択した。

通常、出版社が刊行する事典の場合、この人物や事項は A レベルで何字以内、この人物は B レベルで何字以内と、責任編集者からの指示が来る。その指示に従って書くのだが、書き終えてみていつも消化不良で達成感がない。この消化不良感を払拭するにはどうすればよいか。それは好きに執筆することができる方式を選ぶことである。自分で費用負担をして自分で作ればいいのかという、しごく当たり前の結論に至ったのである。もちろん出費は大きな負担であり、実に今回の出版の場合、刷り部数がすべて売れたとしてもまだ赤字である。だが、全く売れないわけでもなかりと、樂觀的に構えている。売ればその分の赤字は減少する。負け惜しみに近いが、それも楽しみのひとつだ。

### 販売は手作り

出版は、資料を集め取材し、原稿を作って版元に渡し、編集や造本・印刷を経て、各種の出版流通により読者の手に渡るまでの〈総過程〉である。受け手が図書館の場合は、蔵書として所蔵されるまでの総過程である。図書館での勤務が長かったわたしなど、この蔵書までの総過程という考えを忘れたことはない。今では、総合目録で自著の所蔵状況も簡単に判明する。

今回の出版社の社主は長年の付き合いのある友人で、社は取次に口座を持っている。担当者からは編集や誌面の組版まで、ありがたいアドバイスをもらって、多くを自分で決定することができた。販売面でも、DMの送付は版元が受持ってくれたが、宛先リストは自分で作成した。作業は大変だが、様々な作業が自分の手の届く範囲にあるのが嬉しい。

これまでわたしは幸いなことに、復刊を含めて八冊の本を刊行できた。依頼を受けて書いたものもあり、完全自費の出版もある。復刊を別にすれば、発行はすべて異なる版元である。したがってその流通も様々で、それゆえに CiNii Books など総合目録の所蔵状況も様々である。科研報告書を含め自費のものや書店ルートに乗らない出版物の、図書館での所蔵は多くわたしの寄贈による。手作り感がこうして所在目録に反映される事態もわたしには楽しい。

あれこれと今回の手作り志向の出版のことを書いてきた。でもやはり売れてほしいと思う。それは何より本書の評価でもあり、その手作り志向がやっと思われと思うからである。